



Title	赤木昭三名誉教授追悼号の刊行にあたって
Author(s)	和田, 章男
Citation	Gallia. 2015, 54, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61949
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

赤木昭三名誉教授追悼号の刊行にあたって

2013年10月26日、赤木昭三先生がご逝去されました。享年八十五でした。前年に亡くなられた原亨吉先生の後を追うような突然のご逝去でした。

赤木先生は、大阪大学文学部仏文学専攻の助手、教養部助教授を経て、1971年から1991年まで20年間にわたって、仏文学専攻において教鞭をとられました。定年退官後は再就職の申し出も丁重に断られ、楽しみにしておられた研究三昧の生活を送っておられました。退官後しばらくは仏文学研究室の予餞会・同窓会にも奥様の富美子先生とともにご出席いただき、研究の近況報告を楽しそうに話してくださいました。そしていつも誰も気づかないうちに、そっと退出されたものでした。人に気遣わせないよう、ご自分の存在を押し付けないようにする赤木先生らしいダンディズムでした。そしてこの度も誰にも気づかれないうちに、そっと人生から退出されてしまいました。

赤木先生はパスカルと真空の問題をテーマに、日本人として戦後初めてフランスで博士号を取得され、メナール版『パスカル全集』の翻訳・編集においても中心的な役割を果たされました。原先生はパスカル数学論文について、赤木先生はパスカル物理学論文について貴重な業績を上げられ、両先生のご高名によって阪大仏文学研究室はパスカル研究の「大阪学派」と称されるほどでした。「文理融合」の先駆者だったとも言えるでしょう。

本号には仏文学専攻の卒業生・修了生、またパスカル研究会の会員の方々から赤木先生への追悼エッセイをご寄稿いただきました。それらのエッセイでは赤木先生の学問への厳しさと思いやりのあるお人柄とともに、講義、日常の会話、手紙や葉書によって伝えられた忘れ得ぬ先生の言葉が記されています。それらは押し付けられるのではなく、心にしみいるような味わいのある人生の助言です。

「若い間はできるだけ幅広く勉強なさい。いずれ否応なく専門的になっていくのですから」―専門力と教養力、今も大学でめざそうとしている教育の目標です。赤木先生ご自身が深い専門性と広い教養力を兼ね備えた学者でした。このように広い視野の持ち主であったが故に、パスカルやデカルトのような時代のヒーローの背景に沈んでいたリベルタンたちに関心を持たれたのでしょう。フォントネルの『世界の複数性についての対話』やシラノ・ド・ベルジュラックの『日月両世界旅行記』のご高訳、そして退官後に刊行された『フランス近代の反宗教思想 ―リベルタンと地下写本』はヒーローたちの陰に埋もれていた思想の群を新鮮な息吹とともに蘇らせました。

富美子夫人との共著『サロンの思想史』もまた、サロンという17、18世紀の思想形成の場に着目し、人々の交流の中から生まれ出る、思想誕生のダイナミズムを捕えたものです。赤木先生の最終講義は、『パンセ』の読者を主題化したもので、パスカルは誰に向かって語っているのか、現代のわれわれの目に見えない当時の読

者の姿を、歴史の闇の中から浮かび上がらせようとした名講義でした。

パーティー会場からさよならも言わずにそっと出て行かれた赤木先生、もう少しお話ししたかったです。

(和田章男)

以下に掲載する赤木昭三先生の略歴および研究業績目録は、本誌第31号（1992年3月刊「赤木昭三教授退官記念号」）所収の記事を改訂したものです。作成に際しては、赤木富美子先生ならびに、大阪大学フランス語フランス文学会の柏木隆雄、永瀬春男、武田裕紀の各位から多大なご協力を賜りました。ここに記して篤く御礼申し上げます。

(山上浩嗣)